

仕事と私事を支える環境と考え方



赤木友紀

東京農工大学工学部生体医用システム工学科工学
 学研究院生体医用システム工学専攻
 [183-8588] 小金井市中町2-24-16
 准教授, 博士(工学).
 専門はバイオマテリアル.
<https://sites.google.com/view/tuat-akagi-lab/home>

働く母にとっての課題は、「仕事・育児のバランス」をどうとるのか、そして、「そのバランスをどう受け入れるか」にあるように思う。一般企業とアカデミアでは制度や仕組みが異なると思われるため、筆者のアカデミアの立場からお話したい。

まず、筆者の家族構成は、同業者の夫と子供の3人家族である。両実家も遠方にあることから、基本的に実家のサポートはなく、シッター制度や病児保育等も利用せずに現在に至る。出産・育児時のポジションや研究環境にもよるが、多くの女性研究者は、育休はもちろん、産休も十分にとることは難しいのではないかと思う。学科の会議や役割など免除されるものもあるが、研究室の学生に対する研究指導や相談、また、共同研究や予算の申請等は、今後の研究活動にも大きくかわるため進めていく必要がある。子供を預けられる保育園を見つけて復帰したとしても、病気時の対応など、課題は山積みである。

筆者は、産後4カ月頃に仕事に復帰した。復帰直後は順調だったが、子供が生後5カ月から2歳頃までは、保育園の洗礼とも言うべくさまざまな病気に罹患した。そのため、月に1-2回は通院し、症状が重いときには2週間近くお休みをしたこともあった。この期間は、子供の症状が落ち着いたときに、様子を見て仕事をするという日々だったと記憶している。ただ、予定外だったのは、筆者自身も産後5カ月頃から体調を崩すことが増え、突然の高熱に始まり、頭位目眩症や全身蕁麻疹、酷いときには喉に多数のヘルペスができてしまい、医師を驚かせたこともあった。外部サポートなくとも、夫婦のみで気合いで乗り切れることはできるが、やはり負荷は大きいということだろう。こうなる前にいろいろなサポートを受けるべきだと思われるかもしれないが、元々体力には自信があり、産後の大幅な体力低下は想定外のことであった。加えて、仕事・家事・育児と日々追われていたものの、精神的な負担は感じていなかった。だからこそ、外部のサポートなくともやってこられたが、仕事や育児に費やす時間を確保するという意味では、利用できる制度は積極的に使うことをお勧めしたい。筆者は、育児と仕事にける時間のバ

ランスを考える中で、どちらかと言うと育児に費やす時間を重要視してきた。仕事が多忙な時期は、睡眠時間を削ることも少なくはないが、基本的には自分の後悔のない育児と仕事のバランスをとりながら過ごせていると思う。もっと仕事に注力したいという時期が来たら、さまざまなサポート制度を利用することも考えたい。

とはいえ、仕事面で、思うような活動ができないことに対する不安やもどかしさは、常にある。ただ、出産直後に比べ、最近では、そういった気持ちも減ってきたように感じている。この理由として、一つは、いろいろな方と話をする中で、自身の気持ちの落としどころを見つけることができるようになってきたことにある。人によって何に重きを置くかなど、バランスの考え方は異なるが、同様の悩みを抱えている方は多く、自身が納得のいくバランスを見つけ仕事と向き合っているのだと感じた。もう一つは、共同研究をはじめ、一緒に研究をしてくださる方が増えたことである。数年前までは、異分野でPIの形で研究に取り組んできた経験からか、一人で研究を進めなければならないという考えがあった。しかしながら、自身の範囲外の技術・知見が必要となったときに、協力してくださる研究者の方がいて、また、共同研究として声をかけていただける機会が増えてきたことで、限られた時間の中でも成果に繋げることができるようになったことは、とても大きいと感じている。

以前は、出産・育児に関してあまり理解がなく、周囲からあまり良い顔をされなかったという話をうかがったことがある。ただ、筆者については、大学院時代の教授・(当時)助教が積極的に育児をしていたり、講師時の(当時)准教授が17時には帰宅されている環境があったため、出産・育児に関してネガティブな気持ちをもたずにここまで過ごすことができた。最近では、さまざまな制度ができ、取り巻く環境も変わってきていると感じている。これから、増加する女性研究者に対しても、ポジティブな印象を与えることができるよう、筆者自身も工夫をしながら日々、仕事と育児に取り組んでいきたい。